

三岸節子の言葉とともに

率直な語り口で、名随筆家としても知られる三岸節子。エッセイやインタビューで語られた言葉とともに、絵画作品を紹介します。

人物について語る言葉

絵に描く対象としては「気兼ねをするのがいや」と敬遠していた「人物」ですが、言葉では、交流のあった人々のことをしばしば語っており、周りの情景も含めて的確に表現しています。例えば、16歳のときに両親の反対を押し切って洋画家になるため上京し、最初に師事した画家、岡田三郎助(1869-1939)については次のように語っています。

岡田先生は官展の大御所でしたけれど、それはやさしい人。私の父よりも『お父さん』と呼びたいくらいやさしい人なんです。いつだったか、途中で雨が降ってきたんです。そしたら先生が玄関のところで何かごそごそしておられた。帰るときに胸がいっぱいになりました。雨で濡れないように外の石の上に脱いであった私たちの靴を、新聞紙を敷いてみんな中に入れて下さっていたのです。私の靴はボロ靴だった。(注1)

この描写から、岡田がいかに人間味あふれる人物であったか、また裕福な家に生まれながら、家運が傾いたあとの東京での節子の生活がどのようなものだったかが伺えます。岡田が描いた節子の肖像画からも、画家を目指す教え子を一人の人間として尊重するまなざしが感じられます。

岡田が教授を務める女子美術学校を卒業後、すぐに結婚した画家・三岸好太郎についても、節子は多くの言葉を残しています。

怖い顔をしていますけど、私にも子どもたちにも、とっても優しい人でした。でも、いろんな意味で大変な人。十年一緒に暮らしましたが、後半は、自殺することしか考えませんでした。(中略)名古屋から「コウタロウ、シス」という電報が驚官の家に届いたとき「ああ、これで私が生きていかれる」と思いました。(注2)

好太郎との生活がどれほど苦しいものだったかが伝わってきますが、節子はまた次のようにも回顧しています。「三岸好太郎といふ、まことに破綻の多い、素朴であるが不敵な面魂をたくはへた天才と生活をともにした事実は、大きな代償を払って学びとつた人生である。」(注3)―。妻としての苦しみと、芸術家としての成長とが拮抗する複雑な状況を物語っています。また、節子が好太郎の作品について述べた言葉は、好太郎芸術の最初の理解者としての示唆に富み、当時の評価を知る上でも貴重な資料となっています。

美について語る言葉

私は美しいものが好きだ。何かをこの地上において求めてゐる。満足のできるもの。完美なものを。純粹無垢のものを。精神がいつも渴いた砂のやうにオアシスを求めてゐる。完美な理想に向つて一生飢ゑつづけてゆく人間である。(注4)

節子は、絵を描く上では理想主義者であり、完璧主義者でありました。常に自分の絵に満足することなく、生涯をかけて完全なる美を画布の上に追求しつづけました。「結局、画家の作品は完成といふことがないのではあるまいか、とかねがね自問してゐるのです。」(注5)と60歳の節子は語っています。

好太郎の死後も節子は、女性洋画家の第一人者として力強く歩みを進め、60歳を過ぎて二度目の渡仏を果たします。そこで風景画家として大きく開花し、20年以上の歳月を異国の地で過ごしました。その間、絵画の制作と並行して、多くのエッセイを執筆しています。描くことと、書くこと、この二つは節子にとって常に身近にありました。生活のよしなしごとを綴ったエッセイにはユーモアがあふれ、芸術論を展開するときには鋭い切れ味を見せます。節子が紡ぐ言葉からは、絵画作品の背景にある作家の美意識や哲学、思いがにじんでおり、作品を読み解く手がかりを与えてくれます。

【特集展示】『女人短歌』表紙絵原画

短歌誌『女人短歌』は、1949(昭和24)年に発行された、女人短歌会の機関誌です。男性中心の歌壇の中で失われてきた女性短歌の良さを復活させること、そして戦後、文化を渴望する気持ちが創刊に結びつきました。その表紙絵を飾る画家として選ばれたのが、三岸節子でした。女性画家による美術団体「女流画家協会」を結成するなど、女性画家のリーダーとして活躍していた節子は、『女人短歌』の表紙絵を描くのもっともふさわしい人物だったのでしょう。その後40年以上の間、節子は表紙絵を担当しました。油彩画とはまた違い、ペンや鉛筆なども用いて描かれた軽妙な味わいをご堪能ください。



『女人短歌』創刊号表紙絵原画
©MIGISHI



『女人短歌』127～134号表紙絵原画
©MIGISHI

(注1) 吉武輝子『炎の画家 三岸節子』1999年、文藝春秋、35頁

(注2) 三岸節子自選画文集『花こそわが命』1996年、求龍堂、26頁

(注3) 三岸節子『花より花らしく』1977年、求龍堂、241頁

(注4) 三岸節子『美神の翼』1991年、求龍堂、168頁

(注5) 三岸節子『花より花らしく』1977年、求龍堂、59頁